CHINA TOURISM

中國旅游

中国

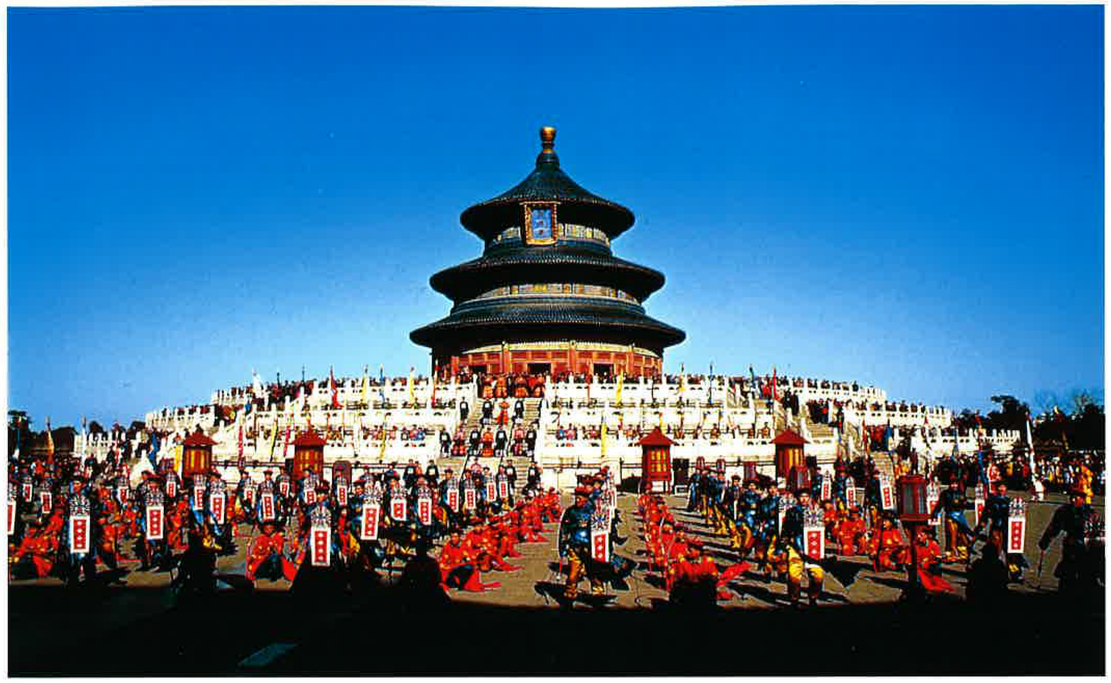
世界遺産

天壇



中华人民共和国国家旅游局
CHINA NATIONAL TOURISM ADMINISTRATION





天壇　世界文化遺産

天壇は北京市の南北を走る中軸線の南端にあり、明・清両代の皇帝が天の神を祭り、雨を乞い、五穀の豊穣を祈るところで、明の永楽十八年(1420年)に築造され、清の乾隆年間(1736-1796年)の改築を経て今日の規模に形成された。

天壇は、東西の長さ1700m、南北の幅1600m、総面積273万㎡の建築群からなり、圜丘と祈穀の2壇を含み、内外2層の塀で囲んでおり、全体は「回」字形を呈している。塀の北部分はアーチ形をなしており、南部分はそれぞれ東西両塀と接し、直角をなして四角形のようにしている。「天地牆」と呼ばれたこの「北丸く南四角」の塀の配置は、「天は丸いもので、地は四角のもの」、といった古代中国の天地観から考案したものらしい。外壇を囲んだ塀の東、南と北には門がなく、西だけは圜丘壇門と祈穀壇門（天壇門とも呼ぶ）の2門が設けられた。これに対して内壇を囲んだ塀は、東西南北の4面にも門がある。内壇は祭壇と斎宮が設けられてあり、東西に走る壁を境に、南は天を祭る圜丘壇で、北は五穀の豊穣を祈る祈穀壇である。この南北の両壇は、レンガを用いて地面より高くできた、長さ360mの通路ー丹陛橋でつないでおり、丹陛橋は天壇の南北を走る長さ1200mの軸線の一部である。

天壇は、最初の名は「天地壇」と呼ばれ、明の嘉靖九年(1530年)北京北部に地壇ができ、天と地の神を分祭することが実現した後になって、はじめてその名が示したとおり「天壇」となった。天壇の主体建築は内壇に集中しており、南には圜丘壇があり、北には祈穀壇（祈年殿）がある。南北の両壇は広くて平坦な「海墁大道」、つまり丹陛橋を用いて完全な1組の建築群を作り上げている。境内は樹齢の長いコノテガシワの老木が生い茂り、荘厳静粛の雰囲気に満ちている。デザインと築造工事には中国を代表する明・清両代の建築芸術を集めた。祈年殿と皇穹宇は木造の円形の建物で、大きくて精巧にできた古代建築の精品である。環境配置の面では、広い面積の木々と植生を用いた。これは古代の人々の「天人協和」といったエコ意識の具現である。天壇は場所の選定、企画、デザインから、祭祀の行事や樂舞に至るまで、すべては古代の『周易』が説いた陰陽や五行学説に基づいており、「天」に対する認識や、バランスの取れた「天人関係」および天の神への祈願が託されている。天壇は1994年、『世界遺産リスト』に書き入れられた。



祈年門

斎宮

西天門内南側にある。天壇に来て天を祭り、五穀豊穣を祈る皇帝が沐浴したところ。敷地面積は4万㎡で、周囲は2重の御溝で囲んでおり、御溝に沿っては、長さ163間の長い廊下が建てられた。斎宮は「小さな故宮」の称がある。全部で60あまりの部屋のうち、本殿、寝宮、鐘鼓楼などは主要建物である。宮城も建てられてある。これを囲む城壁は2重からなり、外側のものは「磚城」、内側のものは「紫牆」とそれぞれ呼んだ。外城は防御施設として設けられ、4隅には宿直部屋がある。内城は前、中、後の三部分に分かれる。前半は本殿を中心とし、後半は皇帝の寝宮である。中部は細長い庭で、両端には太監の宿直部屋がある。東北部鐘鼓楼の太和鍾は、明の成祖・永楽帝が在位したときに鋳たもので、天を祭る行事が始まり、皇帝が斎宮から立ち圜丘壇に到着するまでは鐘を叩き、そして行事が終わるときは、再び鐘を叩いて式の終わるのを告げる。

圜丘壇

圜丘壇は天壇の真南にあり、北にあって南に面しており、敷地面積は44.66万㎡で、圓丘、咆星門、皇穹宇、神庫、神廚、宰牲亭などの建物からなっている。昔、毎年の冬至の日が訪れると、皇帝がここで盛大な「天を祭る」式を挙げた。明の嘉靖九年（1530年）にできた当時は、圜丘壇の壇面が青い瑠璃レンガに漢白玉石を混ぜて敷いたもので、清の乾隆十四年（1749年）の改築で、壇面は青石に改められた。全体は、「天は丸いもの、地は四角のもの」を象徴させる意味で、外側は四角、内側は丸い2重の低い塀で囲んでいる。壇は合わせて3層ある。層ごとに用いられた石も、周囲を囲んだ塀のレンガ数も、階段の段数もいずれも9の倍数である。これは「九重の天に上る」といった古代中国人の天地意識からヒントを得たものである。圜丘壇の上に立って、たとえ小さく話したとしても、声は大きくて遠くまで届けられる。これは壇の地面が滑らかで、速く周囲に伝わった音波が壇を囲んだ石の欄干にぶつかって速く反射し返したからである。

皇穹宇

圜丘壇の真北にある皇穹宇は、明の嘉靖九年（1530年）に築かれた円形のレンガと木造の宮殿である。青い瑠璃瓦を敷いた単層の屋根を頂き、白色の須彌座の上に立った佇まいは、まるで開けた大きな傘のようで、壮麗で美しい。全体は8本の柱で支えられ、上には横桁など用いなかった。多くの升形を畳んでできた天井は、だんだん中心部に集まるように集中し、中央部に丸い形の藻井、つまり天井を形成させた。殿内は緑の色を基調とし、金色の竜の図案は華麗で光り輝く。本殿に上る段階は3つの石を用いた。回音石と呼ばれたもので、最初の1つの上に立って1回手を叩けば、1回のこだまが聞こえてくる。2番の石の上に立って1回手を叩けば、2回のこだまが聞こえ、そして3つ目に立って1回手を叩けば、3回のこだまが聞こえてくる。殿内真ん中にある石台宝座は、「皇天上帝神」の位牌を祭ったところで、宝座前両脇の石台は、歴代皇帝の祖先の位牌を祭ったところである。殿外の東西には脇殿がある。日月星晨と雲雨風雷諸神の位牌を祭ったところである。現在の様子は最初ままのもので、展示されている蝋人形は、清代の天神祭祀行事の担当役人である。

回音壁

回音壁とは、皇穹宇本殿とその東西の脇殿を囲むアーチ形の壁のことで、高さ3.72m、厚さ0.9m、直径61.5m、1周の長さは193.2mである。壁は磨いたレンガを用いて畳んでできており、上には青い瑠璃瓦を敷いた。壁面は滑らかで規則があるアーチ形を呈していて、音波の反射にとても有利である。2人がそれぞれ東西の両端に立って、耳を壁面に貼って話をすれば、音波は壁面にを伝わって遠く200m以外のもう1端に到着できる。声がいくら小さくても、相手ははっきりその話を聞き取れる。回音壁と名づけられた所以である。

丹陛橋

天壇の建物は主に内壇を走る中軸線の南北両側にある。南部は圜丘壇があり、北部は祈穀壇がある。この両壇を連結するように、長さ360mで、レンガを用いて地面より高くできた通路、つまり丹陛橋がある。丹陛橋はまたの名を神道、または海墁大道といい、長は360mで、幅は29.4m、高さは南端の1mからだんだん北端の3mに引き上げられた。これは、昔の皇帝がこの



斎宮



皇穹宇


回音壁


皇乾殿の内部内景


祈年殿の内部内景

道に沿ってだんだん高く行き、ついに天宮に到着する意味が含まれた。丹陛橋の真ん中を走る部分は神道と呼ばれ、左と右はそれぞれ御道と王道と呼んだ。神道は天帝や神様が歩く道で、皇帝が御道、そして王公大臣が王道を歩くことになっていた。橋の下にある東西向けのトンネルは祭祀前、犠牲となる家畜をと畜場へ追いやるときの通路であった。

祈穀壇

祈穀壇は天壇の北部にあり、敷地面積が72.34万㎡で、主要建物には祈年殿、皇乾殿、神廚、宰牲亭、長廊などがある。昔、毎年の春にここで盛大な「祈穀大典」が催され、五穀豊穣を祈った。祈穀壇は四角形の塀で囲んでおり、1週の長さは659.1mで、東、南、西、北の四面にそれぞれ1つの券門（アーチ形門）が開かれた。南券門の内側には、上には青い琉璃瓦の屋根を頂き、下に漢白玉石の基礎を持つ、高くて城門と思わせる五間の大宮門がある。祈年門である。門の外にある緑色の琉璃レンガでできた燔燎は、昔の皇帝が天神祭祀のときに松柏の木を燃やし、祝板（祭文）や祝帛を焼いて天神さまにささげたところである。祈年門をくぐったところは庭になっており、庭の真ん中には祈穀壇がある。壇は3層に分かれ、高さは約4mで、敷地面積は約5900㎡、形は圜丘壇と同じ。3層とも台面はすべて磨いたレンガを用いてできており、周囲は漢白玉石の欄干で囲み、欄干の彫刻は精緻を極めた。最上層石座の欄杆の上と排水口に刻まれたものは竜で、その他の2層はそれぞれ鳳凰と雲になっている。

祈年殿

祈年殿は天壇においても、最も雄大で最も華麗な建物である。想像した天までは最も近いため、昔の皇帝が天帝と「密談」をしたり、五穀豊穣を祈ったりしたところとなった。祈年殿は俗に無梁殿と呼ばれた。これは、建物の築造に大きくて長い桁や釘をいっせいに用いず、完全に28本の大きな柱と数多くの枋、桱、楠、閂と榫に頼って一体につないだからである。祈年殿は「敬天礼神」の思想に基づいたものであるため、「天は丸いものであること」を示すように、建物は円形のものにされ、青い瓦を敷いた屋根を以って青空を象徴させた。高さを九丈九尺にしたのは、中国では、九九は「天数」であることから由来したもの。1週の長さ30丈の丸い屋根は、1ヵ月には30日があること示すもの。殿内の28本の楠の柱のうち、真ん中の4本は竜井柱といい、春夏秋冬を象徴し、ほかに2輪に分かれた24本のうち、内輪の12本は1年に12ヵ月、外輪の12本は、1日に12の時辰（1昼夜を12等分にした時間単位）があることを示す。2輪を合わせた24本は、1年の24節気の喩えで、全部28本は28星座を示す。これに藻井を支える8本を入れた全部36本は36天罡を示し、宝頂中央の雷公柱は「天下一統」を示すものである。頭を上げてみると、雄大な雰囲気に圧倒される。祈年殿は内外とも、竜や鳳凰と極色彩の絵が施された。上層部の軒下には、竜の文様を刻し、「祈年殿」と大書した扁額がかかっている。

皇乾殿

皇乾殿は祈年殿の裏、祈年牆で囲んだ長方形の庭にあり、瑠璃門をくぐると中に入る。脇殿式のような宮殿で、青い瑠璃瓦を敷いた屋根を頂き、漢白玉石づくりの欄杆で囲んだ台座の上に立っている。本来は、もっぱら「皇天上帝」と歴代皇帝の祖先の位牌を祭る殿であるが、後には祭祀用の旌旗や儀仗、楽器などを収蔵する専門倉庫となった。昔、毎月の1日と15日に、祭祀を司る役所に遣われた担当係はここにきて、


双環亭

掃除したり線香をささげたりする。祭祀が始まる前の日、皇帝がここで線香をささげる礼をしてから、禮部尚書が線香をささげて3度跪く礼をした後、位牌は太常寺卿が率いる担当官により竜亭に運び、続けて鑾儀衛の様縦により、それぞれ相応の位に安置して祭祀を受ける。

双環万寿亭

祈谷壇西門外の木々の茂みにある。重厚な屋根を持つ2つの円形の亭を連なってできた双輪のようなものである。もともとは清の乾隆帝・弘篇がその母親の誕生祝の為に、中南海で築かせたものだが、1977年に天壇に移された。付近には六角形で極色彩を施した百花亭、万勝亭和扇面亭などの建物がある。これらの亭や画廊はさまざまな風格を持ち、大小もさまざまで、互いに引き立て合って趣を成している。


祈年殿の藻井

祭天大典（天を祭る行事）

明・清時代の年3回の祭祀行事は、いずれも皇帝の自らの主宰で天壇で行われた。天壇は天を祭る場所だけにとどまらず、雨を乞い、五穀豊穣を祈るところでもある。毎年正月の上辛の日に、祈年殿では祈穀の礼をし、五穀の豊穣を祈る。4月の吉日には、圜丘壇で雩礼をし、作物の為に雨を乞う。毎年冬至の日に、皇帝は圜丘壇で告祀の礼をし、五穀豊穣のことを天帝に告げる。皇帝の主宰の下で皇天上帝を主として祭るが、歴代の祖先や日、月、星辰、雲、雨、風、雷などの神様も祭る。これが祭天大典、つまり天を祭る行事である。

中国では、「天」への信仰は早くも周朝に定着した。歴代の統治者も、自らのことを「天子」とし、天命を受けたものとする。天は世間のすべてを主宰でき、天は俗世間の帝王の君父である以上、帝王は当然、天子になり、天帝祭祀も当然、天子の特権になった。

和璽彩色絵

和璽彩色絵は清代の官式建築の主要彩色絵で、皇族の宮殿や壇廟の本殿および堂、門など重要建築に限って用いられ、彩色絵の中においては最高等級のもので、明代末期の




王府井工芸品商店

官式譜子彩色絵が日に日に完全なものになることを基礎に、皇室の特権の必要を満たすために生まれた新しい彩色絵である。画面では、皇族権力のシンボルである竜や鳳凰は主導的地位を占め、構図は厳しく、図案も複雑で、広い面積で「瀝粉貼金」法を用いる。和璽彩色絵の黄金の使用量は大きく、竜や鳳凰、珠玉など主要なものは、いずれも金を用い、青、緑または赤を地としてそれを浮き上がらせる。和璽彩色絵の文様の設置、色彩の配分、工芸などには、きちんとした規則がある。異なる内容により、和璽彩色絵は「金龍和璽」、「龍鳳和璽」、「龍草和璽」などに分かれている。

望燈

圜丘壇の西南隅に、望燈の竿を立てる石の基礎が3つ残っている。昔、祭祀の日の明け方に、高さ九丈九尺九寸の竿を3つ立て、上に直径六尺で高さ八尺の特製の大きな燈篭を吊るす。これを天灯または望燈と呼ぶ。燈篭は針金を用いて枠を編み、外側は黄色い綿紙を張って作ったもので、中には特別な蝋を用いて作った長さ四尺、太さ一尺の大きい蝋燭を燃やす。蝋燭があまりにも大きいため、12時間連続で燃えられる。中国の貴重な蝋工芸品の1つである。

祝祭行事

北京の祝祭行事は多い。特に重要なものとしては春節、中秋節、国慶節、元旦などが挙げられる。花会、廟会（縁日）と燈会（灯篭大会）などは、旧正月の春節、元宵節の間に催される盛大な民俗活動である。ほかに観光のイベントも多くある。例えば北京音楽祭、国際合唱祭、中国芸術博覧会、北京国際観光祭、延慶冰雪祭などはそれである。

レクリエーション

演劇場（一部）：天橋楽茶園、老舎茶館、恭王府戯楼、梨園劇場、長安大戯院、保利大廈国際劇院、北展劇院、北京音楽庁など。

ゴルフ場（一部）：国際ゴルフ遊楽公司、朝陽ゴルフクラブ、順義ゴルフクラブなど。

バー（一部）：主に亮馬橋、後海、三里屯3地に集中している。

味覚

北京は中国の4大料理の広東料理、山東料理、四川料理、淮揚料理をそろえているほか、フランスやアメリカ、イタリア、ロシア、日本、韓国、ベトナム、インドネシア、タイなどのレストランも数多くある。ドナルドやケンタッキ、ピッツァなどの西洋ファストフードのチェーン店は、なおさら多い。

各ホテルは、有名な料理人が集まり、豊かな環境があり、それぞれの手自慢料理がある。町の隅々には料理の老舗があちこちに点在している。町のレストランでの食事は、一般的に安いほうである。ホテルやレストランでは、クレジットカードや小切手の使用は可能で、一般的に10%～15%のサービス料が必要である。

北京の伝統料理：北京ダック、宮廷料理、羊肉のしゃぶしゃぶ。

風味スナック：杏仁茶、奶酪（バッター）、小窩頭、八宝蓮子粥、豌豆黄、茯苓餅、肉末焼餅など。


北京ダックの丸焼き


北京王府井大街の新東安商場


北京仿膳レストラン

特色レストラン：北京全聚徳烤鴨店、王府井全聚徳烤鴨店、便宜坊烤鴨店、仿膳飯荘（宮廷料理）、聽鸝館飯荘（宮廷料理）、東來順飯荘（イスラム料理）など。

ショッピング：

特産物、工芸品：景泰藍、象牙彫刻、玉器、漆彫刻、泥人形、絹人形、京劇の隈取、凧、切り紙、漢方強壮剤、金石篆刻、文房四宝、骨董・掛け軸、中国民間楽器、シルク・刺繍、珠玉・翡翠、中国古典家具、カシミールなど。

主要ショッピング街：王府井大街、前門大街、西単商業区、建国門外大街、朝外大街、琉璃廠古文化街、潘家園中古品市場、秀水市場など。

観光土産市場：北京市内免税品店、北京友誼商店、北京工芸美術商店、元隆絲綢股份有限公司、北京古玩城など。

漢方薬、掛け軸、本屋：栄宝斎（書画）、同仁堂薬店（漢方）、王府井外文書店など。

市内交通

北京の市内交通はとても便利で、地下鉄、バスなどは四方八方に通じる。空港、駅、各ホテル、観光の見所と各交通要所では、24時間タクシーが走っている。タクシー料金は10元を起算とし、1kmごとに1.2元から2元の追加計算である。メタルがあるので安心できる。

北京の地下鉄は現在のところ1号線、2号線、13号線（軽軌道）と八通線が開通されており、各駅とも交通の中継地になっている。

北京は市街が平坦なため、人力三輪車で市街見学をするのには特別な面白みがある。各観光見所では人力三輪車が雇われる。


北京市潘家園骨董品市場

一部のホテル

店　名	クラス	所在地	北京の電話局番（86-010）
北京飯店	★★★★★	北京市東長安街33号	65137766
北京国際飯店	★★★★★	北京市建国門内大街9号	65126688
中国大飯店	★★★★★	北京市建国門外大街1号	65052266
貴賓楼飯店	★★★★★	北京市東長安街35号	65137788
ケンピンスキ飯店	★★★★★	北京市朝陽区亮馬橋路50号	64653388
昆侖飯店	★★★★★	北京市朝陽区新源南路2号	65903388
シャングリラ飯店	★★★★★	北京市海淀区紫竹院路29号	68412211
長富宮飯店	★★★★★	北京市建国門外大街	65125555

一部の旅行社

社　名	所在地	北京の電話局番（86-010）
中国国際旅行本社	北京市復興門内大街103号	85228888
中国旅行社本社	北京市北三環東路2号	64622288
中国青年旅行本社	北京市東交民巷丙23号	65078063
中国康輝旅行本社	北京市朝陽区農展館南路5号	65940856
北京海外旅遊公司	北京市建国門外大街28号	65158573

全国統一の特種サービス電話

中国国際電話局番:0086　北京の電話局番:010　警察通報先:110
交通事故通報先:122　電話番号案内:114　国内長距離電話人工予約:113
長距離電話予約:115　火事通報先:119　救急センター:120　天気予報:12121



中国国家観光局（東京）

東京都港区虎ノ門2-5-2 エアチャイナビル8F
郵便番号：105-0001
電話：03-3591-8686
ファックス：03-3591-6886

中国国家観光局大阪事務所

大阪市浪速区湊町1-4-10CAT ビル4F
郵便番号：556-0017
電話：06-6635-3280
ファックス：06-6635-3281

中華人民共和国国家観光局

アドレス：北京建国門内大街甲9号
電話：0086-10-65201514
ファックス：0086-10-65137871
ホームページ：http://www.cnta.gov.cn

CHINA TOURISM

中國旅游

天壇



中华人民共和国国家旅游局
CHINA NATIONAL TOURISM ADMINISTRATION



ご覧いただきありがとうございます！